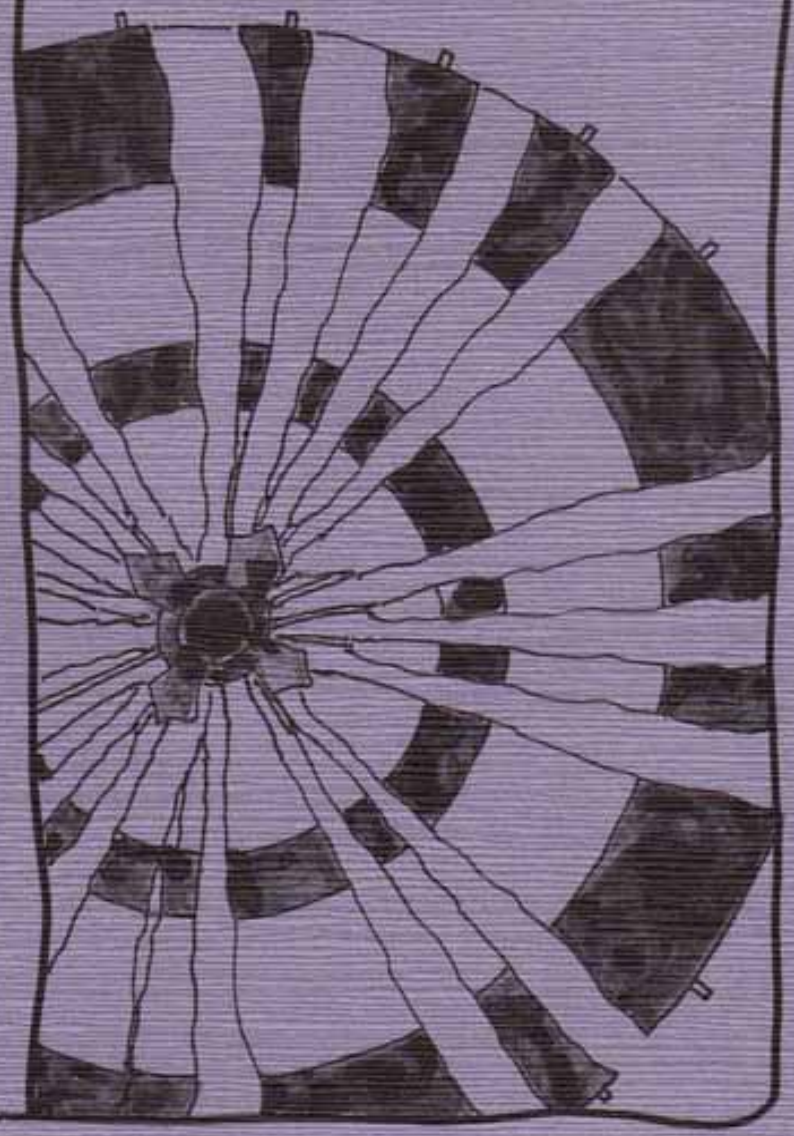
やぶれ傘



一三三号
二〇一三年八月

胸元に降りる遮断機油照り　根橋宏次
耳のツボ目のツボ押して明日は夏至　青谷小枝
ひまはりの丈のバラバラ小学校　きくちきみえ
落ちてゐる病葉丸いのは桂　大島英昭
間を空けて鳴いて郭公遠ざかり　丑久保　勲
鉄棒の残る廃校栗の花　廣瀬雅男
夏蝶が電光掲示板よぎる　小山よる
降車後の長きホームを行く溽暑　渡邉孝彦
本棚の本に挟まりゐる団扇　藤井美晴
何となく青梅買つてしまひけり　瀬島洒望
短夜の明ける前から土手歩き　白石正躬
目高掬ふ水甕にわが目玉浮く　有賀昌子
舟虫のちりぢり逃ぐる舟屋跡　天野美登里
窯変の壺に活けられ柿若葉　秋山信行
浅草は鬼灯市かどつと乗る　安藤久美子

抄　やぶれ傘句集

選　大崎紀夫

校庭の白線あらた雲の峰　竹内文夫
時々は鱗の光る鰡の群　中島和子
グローブにびしつとボール梅雨晴間　貫井照子
落蟬をそつと林に戻しけり　広瀬　済
夏草の果てに犬吠埼灯台　道林はる子
竿出せば一投目から鯰くる　村田　武
玉葱の不揃ひ四個ネット売り　山本久枝
山あひの植田に水の満ちる夜　湯本正友
水中花きのふの泡のそのままに　吉田幸恵
天井にゆつくり動く扇風機　浅嶋　肇
旧道の一本裏で目高売る　岩藤礼子
七月の風が来てゐる展望台　木村瑞枝
合歓の花上を過ぎゆくモノレール　倉澤節子
向日葵は向こう向きなり畠道　黒澤次郎
暑き日のポテトフライの塩加減　小泉里香

炎昼

大崎紀夫

炎昼の砂場に立つてゐる馬穴
ひと切れの雲うつりゆく草いきれ
ゴミ箱へ缶を捨てれば蠅が飛ぶ
枇杷を食ふこつんこつんと皿に種
青桐の下にやうやく風がくる

雨近し夏うぐひすがそこここで
烏賊釣火また見て眠ることにする
雨あとの鉢に目高が浮いてゐる
鳴いてゐるからす砂場の砂灼けて
水眼鏡手にぶらぶらと揚がりくる
足元を店の猫ゆくかき氷
蚊遣豚リストランテの入り口に

油照り

根橋宏次

ざる蕎麦を一枚通す夕薄暑
堰に来て水はたひらに蚊喰鳥
出口まで見ゆるトンネル捕虫網
橋にふる雨を見てゐる泥鰌鍋
にはとりの飲んでゆきたる日向水
野球部が「ヘーイヘーイ」と雲の峰
青葦の中洲となつてゐたりけり
電球を香具師が吊してゆく夜店
舟虫のどこからとなく戻りくる
胸元に降りる遮断機油照り

メロン

青谷小枝

灯の下に明日食ふ桃をおいておく
ジャスミンの咲いて三階建ての家
縁涼し足引き寄せて夜爪切る
どくだみの花の盛りで毎日雨
鳥居くぐればサンダルが噛む小砂利
倒木のなかば水漬きて糸とんぼ
コーヒーが冷めてときどき遠き雷
耳のツボ目のツボ押して明日は夏至
すると消えするとも一度出る蜥蜴
まだ少し固いメロンのよく匂ふ

ひまはり

きくちきみえ

ゲジゲジが箪笥の角を曲りゆく
あぢさゐの毬より昨夜の雨の粒
ざるそばに乗りたる氷梅雨晴れ間
夕焼けの始まりさうな夏の雲
蟻の巣を目の前に食ぶメロンパン
雨の日のいつもどほりの夏帽子
噴水に風下のある昼餉どき
ポポと鳩鳴く炎昼の橋の上
曲りたるバナナ曲つたまま食べる
ひまはりの丈のバラバラ小学校

病葉

大島英昭

帰りには植田となつてをりにけり
いつからか空の鶏小屋額の花
噴水をななめ左に見てすわる
紫陽花の脇を通つて池に出る
合歓の花手押し信号押して待つ
ひまはりがずらりと咲いて幼稚園
こゑがして木の間にちらり捕虫網
外されぬテニスのネット大西日
落ちてゐる病葉丸いのは桂
ヒメムカシヨモギと遠くでも分かる

甘酒

丑久保勲

稜線を車が走る麦の秋
会長が夏足袋でゐる天神社
物置の屋根より道へ実梅落ち
足元を雀が歩く夏の駅
間を空けて鳴いて郭公遠ざかり
左右見て渡る県道月見草
ぺたぺたと裸足で歩く台所
お向かひに若者のこゑ百日紅
御旅所の脇を通つてデパートへ
甘酒を飲んで女坂くだる

麦畑

廣瀬雅男

椎若葉寺の山門新しく
群がりて踊子草の咲く日向
山法師水車の回る音近く
川岸を走る人居て明け易し
魚跳ねる音の聞こえて明け易し
麦畑小学校の屋根光る
三匹の犬を曳く人柿の花
鉄棒の残る廃校栗の花
人住まぬ家くちなしの花匂ふ
遠富士にひとつ雲置く五月晴れ

夏蝶

小山よる

犬の待つテラス席へとアイスティー
白菖蒲子供は網を池に入れ
夏草のはびこる上に電車来る
髪切りしこと気付かれぬ薄暑かな
蜜豆を母と黙つてただ食べる
日傘してあんなに腰が曲がりをり
日本語と英語交へてあつぱつぱ
同じ駅で降りるカンカン帽の人
紫陽花の一つだけまだ青きまま
夏蝶が電光掲示板よぎる

西日

渡邉孝彦

秋楡の若葉風来るレンガ建て
新緑の中に三角屋根の家
遠くから見る早苗田の青々と
青嵐木立の奥がひどくゆれ
メモをする手帳が日記水羊羹
かなぶんが飛んで物干し竿の空
噴水の周りを歩き続ける児
椅子の位置変へる西日の会議室
降車後の長きホームを行く薄暑
受診後は蟬が鳴くなか帰りけり

団扇

藤井美晴

猫の餌の皿に猫の絵なめくぢり
梅雨晴れ間ミラン・クンデラ死去の報
夏落葉積もる月極駐車場
炎昼の砂場の砂に触れてみる
空也像見し目に赤いダリアの群
水滴が水道管に光り夏
舫ひたる烏賊釣り船の集魚灯
夕雲の色衰へる花柘榴
本棚の本に挟まりゐる団扇
ひまはりがずつと続いて咲いてゐる

青梅

瀬島洒望

馬道を抜けて薄暑の隅田川
消えるまでちと間が初夏のちぎれ雲
小糠雨ブラシの花を見て書肆へ
小糠雨泰山木が咲きさうだ
何となく青梅買つてしまひけり
枇杷実るスクールバスの駐車場
竹煮草砂嚢積まれてゐる空き地
拝殿より流るる雅楽夏祓
枇杷ひとつ昼定食のデザートに
箱詰めの枇杷売る店が赤羽に

短夜

白石正躬

人参の花そこいらの瓶にさし
日の暮の風鈴のなる渡船小屋
傘さして青葉時雨に打たれゐる
屋根の上の雀の声は梅雨の朝
青梅にちよつと触れれば手の内に
電柱の鳩に見られて豆をまき
西日中客を迎へに発つ渡船
山下りてフェンスに干せる汗のシャツ
七夕の夜風はときにどぶ匂ふ
短夜の明ける前から土手歩き

目高

有賀昌子

薄暑はや二階の時計鳴り止まず
奥社への磴百段の木下闇
木下闇ぽろんと楽器不意に鳴る
大仏の伏目やさしき夕立後
上巻は下巻へ続く籐寝椅子
ルノアールの絵のごと日傘傾げ差し
小気味よき鱧の骨きり半夏生
昼の寄席はねて浅草どぜう鍋
目高掬ふ水甕にわが目玉浮く
裸の子をすつぽり受けるバスタオル

舟虫

天野美登里

舟虫のちりぢり逃ぐる舟屋跡
山小屋の昼餉おにぎり麦湯沸く
牛蛙社宅の窓は川へ向き
島へ着くフェリーの汽笛花ユッカ
揚羽来てまた揚羽きて共に去る
真夜中の雷続け様に落ち
突堤の日暮れてゐたる花海桐
瓶に張る手作りラベル梅干漬
ハンカチの花やしづかに夜の来て
玫瑰にお囃の鉦遠くより

柿若葉

秋山信行

やうやうに長雨あがる花菖蒲
夏草や畑に土嚢の積まれゐて
老鶯の声を近くに拭くメガネ
目線まで上げては選ぶトマト苗
梅の実をひとつ蹴とばす不動堂
どこからか水のにほへる額の花
窯変の壺に活けられ柿若葉
夕立やままごとの後そのままに
著莪の花今にも雨の降りさうな
物干しに雨粒のこる夏燕

◇7月・8月の句会案内

月	日	時	句会名	会場	連絡先
7月	4日(火)	AM9：00	こなから会	あいパル	WEP編集室
	4日(火)	PM6：00	うらら会	浦和コミセン3	大島英昭
	5日(水)	PM6：00	ぎんなん会	浦和コミセン3	丑久保　勲
	7日(金)	AM10：00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	7日(金)	PM6：00	なごみ会	浦和コミセン1	秋山信行
	15日(土)	PM2：00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	22日(土)	AM10：00	楽天会	あいパル	廣瀬雅男
	22日(土)	PM2：00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室
8月	1日(火)	AM9：00	こなから会	あいパル	WEP編集室
	1日(火)	PM6：00	うらら会	浦和コミセン8	大島英昭
	4日(金)	AM10：00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	4日(金)	PM6：00	なごみ会	下落合コミセン1	秋山信行
	7日(月)	PM6：00	ぎんなん会	浦和コミセン8	丑久保　勲
	19日(土)	PM2：00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	20日(日)	AM10：00	吟行会(下記注)	武蔵浦和コミセン2	丑久保　勲
	26日(土)	AM10：00	楽天会	あいパル	廣瀬雅男
	26日(土)	PM2：00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室

〔注〕ぎんなん会は奇数月は第1水曜、偶数月は第1月曜です。
8月4日（金）の下落合コミセン。JR京浜東北線「与野」駅徒歩2分。
直前に改めて案内します。
8月20日（日）の吟行。
集　合　10時、JR北浦和駅改札口。
吟行地　見沼・浦和西高の裏側。
句会場　武蔵浦和コミセン2。

◎連絡先
秋山信行　☎048-874-0555
大島英昭　☎048-592-5041
廣瀬雅男　☎048-443-7522
藤井美晴　☎0422-55-2733
WEP編集室　☎03-5368-1870
丑久保　勲　☎048-853-3856

サングラス

安藤久美子

パン工房梔子の花盛り過ぐ
によろによろと蚯蚓現れまた土へ
アガパンサス午後は気怠く過ぎてゆき
梅雨晴間鴉の声が神社より
多すぎる郵便物の梅雨湿り
たこ焼きをたこ焼き好きが半夏生
久々の度の入りたるサングラス
倒木に天牛二匹光りをり
浅草は鬼灯市かどつと乗る
デパートの冷房へ吸ひ込まれゆく